

福音とその「宣教」の一考察，序

今 泉 晴 行

L'Evangelil et sa mission

IMAIZUMI Haruyuki

これからの福音宣教の姿

・・・・・・・・・・フランシスコ・ザビエルの宣教を通して

はじめに

イエスとその福音を、どのようにこの日本の地に根付かせ、日本の文化のなかで開花させていくか、これは日本と日本人が抱える、フランシスコ・ザビエル以来の課題である。

事あるごとに指摘されながら、いまだその具体的な方策が見い出されていないように思える今日、日本に初めてキリスト教を伝えた、フランシスコ・ザビエルの宣教の姿を通して、これからの福音伝播の在り方を考えていきたい。

ユダヤの辺境の地から、弟子たちによって、主として西に伝播したイエスとその福音は、ヨーロッパの地を経て、おおよそ1500年後、公式に1549年、フランシスコ・ザビエルを通して日本に伝来したことは知られたことである。

また、《イエスとその福音》を媒介した宣教師たちは、それを如何に伝え、また伝えようとしたのか。イエスの言（ことば）とおこないそのものと、宣教師たちが伝えようとしたキリスト教理解とに逕庭は存在しなかったのか。

《イエスとその福音》は、どのようにこの地に伝来し、そして、この地の文化のなかで、如何に応接され、今日に到っているのか。

以上を、イエスの《ことばとおこない》と、ザビエルが学び理解し、そして宣教したキリストとその教えを、ザビエルの書簡を通して比較検証していきたい。

〔 〕 フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) の来日の背景

1 , フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier)

フランシスコ・ザビエル (1506 - 52) は、1549年 8 月15日 (天文十八年七月二十二日) 鹿児島に上陸し、この地にその足跡を記したことはよく知られている。ザビエルが乗船したのは、ポルトガル船籍であった。

ザビエルは現在の地理的区分でいえばスペインの国土とされるが、ピレネー山脈の西麓に近いところに生まれた。当時、その地はナバラ王国に属し、民族的には、ピレネー山脈を挟んで、現代の国家区分でいうフランスとスペインの両側に居住するバスク人であった。しかし、その言語ーバスク語は、ヨーロッパ語の系統には属してはいない、独自の構造、語彙を具備した言語である。父親は低バスクといわれる、現代はフランスに区分されている、Saint Jean Pied de Paul に生まれた。

その生まれた城は、母親が嫁ぐとき持参したものである。そして、その名、ザビエルも母方の姓であった。しかし、ザビエルが六歳の時、1512年フランスとスペインとの間に戦が起き、ザビエルの父が宰相を務めるナバラ王国はフランス方についた。この敗戦により、ナバラ王国の地はスペインに組み込まれ、ザビエルは、父親と財産と母国を喪失したのである。

ザビエルは、1525年、十九歳でパリ大学に入る。厳密に言えば、1460年に設立された Quartier Latin にある Collège Sainte - BARBE に十一年間籍を置いた。Georg Schurhammer の検証によると、collège は、ポルトガル王の援助で設立、運営されていたといわれる。ザビエルが、その時もっとも興味を感じていたのはアリストテレスを主とした哲学であった。それ故、普通なら、父親Juanが学んだ法律を専門とするポローニャ大学に登録するはずと考えられるが、彼は神学、哲学を中核主体とするパリ大学を選択したのである。そして、ザビエルは哲学に、とりわけアリストテレスに明け暮れた。その当時、ザビエルは従者を一人従えていた。その生国は消失したとはいえ、さほどの困窮を極めていたわけではないと思われる。やがて大学を終え、教員資格を取得し、régent として基礎過程の学生の指導に当たることになる。

しかし、サヴォア出身者で、羊飼いをしていた十二歳のとき、司祭になると心を決めたペドロ・ファーベルと同室者となる頃、ザビエルの生家も学資を用立てることに困難を覚えるようになった。

2 , イグナチウス・デ・ロヨラ (1491 ~ 1556)

ロヨラは、スペインのバスクの町、ロヨラという町の城主の子として生まれ、三十歳になるかならないかまで、武芸に名誉を求めていた。しかし、ザビエルがパリ大学に入学する四年前の1521年、(ザビエル十五歳の時) ロヨラの兄たちは、ナバラ王国再建を企て義勇軍を組織し、フランスの後ろ盾のもと、かつての首都ハンプロナの城に攻め込んだ。この時、バスク人ながら、スペインの守備軍のなかにいたのが、ロヨラであった。この戦いで、片足の自由を失い傷痕軍人となった。年来の夢である軍人として立つことを断念せざるを得なくなったロヨラは、暗中を模索する日々の末、司祭を志し、パレスチナ巡礼を果たした。そして、三十四歳でラテン語を学び始め、ザビエルがパリに来て三年目、1528年に、ザビエルの Collège Sainte - BARBE と、ル・デ・シャン通りを挟んで立つ Collège Sainte Montaigu に入学し、やがてCollège Sainte - BARBE に転じ、そしてペドロ・ファーベルにつづき、ザビエルの二人目の同室者となった。ロヨラは独特な風貌だけではなく、その信念においても特異なものを具備していた。その信念に基づき、その自叙伝にも記されているが、ザビエルを説得すること四年。それにもかかわらず、相変わらずザビエルは哲学教師を夢見ていた。しかし、

1534年8月15日、聖母マリア被昇天を記念するこの日、ザビエル二十八歳の夏、パリ北辺に位置するモンマルトルの丘に、「マリアの騎士」として「契(ちぎ)り」を結ぶために、ロヨラをはじめ総勢七人で登った。ザビエルとロヨラ、この二人はバスク人であった。

イエズス会の創立の過程で枢軸にいたイグナチオ・デ・ロヨラ(イニゴ)が、後に記した「靈操」の第一靈操のなかに、既に「我々の貴婦人」ということばがあらわれているが、この文言は当然の事ながら、聖母マリアのことを指すが、この書のなかに繰り返し立ち現れてくる。

3, 時代背景

1). 教会の伝統

大教皇グレゴリウス一世(Gregorius, 在位 590年 - 604年)は、「キリスト教精神を最も体現した人」と言われ、使徒ペトロの司教座を引き継ぐローマ教皇聖座は、教義、教理の基(もと)いであり、教導権を具備することを明らかにしていった。また、コンスタンティヌス大帝改宗以来、教会と国家との関係に苦慮し、教会の権威は尊重するもの、皇帝による庇護の名の下で様々な干渉による摩擦が起きていた。ペテロの後継者であるローマ司教は、皇帝に敬意は払うものの、みづからの宗教的な権威と自立性を失わず、また、コンスタンティノープルの司教に対しても、ペテロの使徒の座の優位性、首位権を主張していった。その軋轢と緊張は絶えず消滅することなく、グレゴリウス一世の後継教皇たちも、東ローマ皇帝たちや、またシャルルマーニュ、オットー一世との間にも途絶えることはなかった。教皇たちは、皇帝に代表される「世俗」権力による教会への関与を排除し、西方教会全般をあるべき姿に変えようと力を注いだ。それはおおよそ一世紀にわたり、「グレゴリウス改革」と呼称される大改革であった。そして1122年、教皇カリストゥス二世とドイツのハインリヒ五世との間にノヴォルムスの協約が取り交わされ、聖職者叙任権問題は一応の解決をみた。しかし、これ以降も、教会と国家、また教皇と皇帝、王権との関係には様々な問題が付随して起きている。

また、ベネディクトゥスにより始められたとされる西方の修道院制は、さらに発展し、909年、もしくは910年に教皇に直属する修道院として、南ブルゴーニュにクリュニュー大修道院がアキテーヌ侯ギヨームの尽力で設立された。そして、東フランスのモレームにあるベネディクト会修道院に属していたロベルトゥスは、初め隠修者として仲間と出発したが、やがて1098年シトー会を設立した。そして、修道院の時代と呼ばれることもある十二世紀に、このシトー会にだけでなく、西方教会に大きな影響を与えたクレルヴォーのベルナルドゥスがあらわれ、シトー会は、急速に各地に広がっていった。また修道院の伝播は、即ち、西方ヨーロッパにキリスト教が伝播し、中世においては宗教的には等質の統一体を形成していたということができよう。

2). 「レコンキスタ(西方十字軍)」と十字軍の派遣

1095年、クレルモンの教会会議で、ウルバヌス二世による勸説を受け、宣言された十字軍派遣は、スペインの『レコンキスタ』に関わっていたノルマンの人々をはじめ、一般人、騎士を含んだ混成部隊で、「異教徒の手から聖地を」を叫び、パレスティナに殺到した。対イスラムという意識が根底にあるものの、独特な宗教的な熱狂であった。この機に、軍事的、宗教的情熱を緋い交ぜた騎士修道会が創案され、聖ヨハネ騎士修道会、並びに神殿騎士修道会が現れた。十字軍は断続し、曲折を重ねながら1274まで続いた。ポルトガルが「大航海時代」の先陣を切った理由のひとつに、十五世紀までクラナダ王国に手を焼いていたスペインに較べ、十三世紀には既に「レコンキスタ」を成し遂げていたことも挙げられる。そしてその後、モロッコのムーア勢力に対抗するためキリスト教徒の同盟者を執拗に求めつづけた。

3). 社会趨勢

十一世紀あたりから盛んになってきた農業の技術革新は、畢竟、農業の生産を向上させ、やがて商業の発達を生み出していった。そして十六世紀に到り、それまでは個々に存在していた二つのシステムが、「ヨーロッパ」の諸地方が経済に於いて密なる連携を持つ事が見られるようになる。この「十六世紀の『ヨーロッパ世界経済』」機構に顕著に見られる傾向に長期の物価騰貴があり、それに連動して実質賃金の低下があった(註1)というのは多くの学者によって確認された事実と見えよう。その裏面では、この「世界経済」の内部では農業と工業の分業体制が生まれた。その因果関係には議論もあるが、そのことによって資本の蓄積が可能となり、その蓄積があったからこそ、ポルトガルが他の国々に先んじることができる一因となったのである。

4). 宗教改革

1517年11月1日、万聖節の祝日、免償の在り方に疑問を感じたマルティン・ルターが、ヴィッテンベルク大学の教会と城の壁に、当時の民衆には理解しにくいラテン語で記した「九十五箇条」を張り出し、学者たちに公式に討論を呼びかける。

5). 同窓の同時代に生きた人々

また、ロヨラが最初に入学した聖モンテーギュ学院には、先輩に自意識が強く、畢竟個人主義的傾向が濃い学識豊かなユマニストであるエラスムスがいる。エラスムスは高位聖職者に対する揶揄は其処此処に見られるものの、「私はキリストを承認する。私はルターは知らないが、ローマ教会は知っている。それを私はカトリック教会と同一ものとする。死んでも私はカトリック教会から離れることはないだろう。もしあるとすれば、その時カトリック教会がキリストからはっきり離れているに違いない(註2)」と明言している。また、そして、ほぼ同時期、同学院にラブレがいた。更に加えて、ロヨラが入学する一年前にカルヴァンは学舎を後にしている。これらのことを考えるだけでも、その時代の雰囲気がおのづから察知できる。

4. 海洋国家ポルトガルの黎明

リスボンは、既にムーア人の時代の末期には国際貿易港として海業者、船舶関係者たちが数多く生活する都市であった。1348年秋から1349年にかけてヨーロッパを襲った大疫病により、多くの被害を出し、農業従事者も減少し、農産物が不足し、輸入穀物を必要とするようになった。こういう状況のなかで、海運業者たちは利潤を増大させていた。これらの新興の商工ブルジョワジーたちは、みづからの利益を保持拡大のため、1383年から1385年にかけての王位継承問題、それに乗じて侵入してきたカスティーリアに対する独立戦争において、アヴァス騎士団長ジョアンを担ぎ、王位継承者とした。十字軍の時創設された神殿騎士団は、1312年に廃止され、その財産はいったん教皇庁に差し押さえられたが、新設されたキリスト騎士団に教皇クレメンズ五世の命で移動された。この事実もポルトガルが他に先んじた次第の一端を物語っている。ジョアン一世として即位すると、間もなくスペインに対する備えとして、1386年5月にイギリスとウインザー条約を結んだ。これにより隣国からの脅威は薄らぎ、外海を目指して後顧の憂いが少なくなった。そして、その翌年、1387年2月にイギリスのランカスター公の娘と結婚した。この女性は地理学や航海術に関心を持っていたと言われる。三人の息子たちを生んだが、次男は各地を旅行しマルコ・ポーロの「東方見聞録」を持ち帰った。そして末子がエンリケ航海王子であった。このエンリケ航海王子もまた父に倣ってキリスト騎士団の長にあり、教皇カリストウス三世は、彼に、現在及び将来の海外ポルトガル植民地における完全な宗教的裁治権を与えている。結果として貿易の独占と聖職者叙任権を国王アルフォンソ五世に与えたのである。逆

にこれによって、国王は宣教師の選択と派遣、現地の諸教区教会の建設と維持の経費を請け負うことになった。

このエンリケ航海王子のもと、様々に海運に関する施策が採られた。長期間の海洋航海に耐え得るような船を求め、ムーア人の船を参考にカラヴェル船の建造に成功した。航法をはじめその技術の大半はムーア由来のもので、羅針盤に到ってはイスラム経由の中国の技術である。

エンリケ航海王子に代表される人々の種々の準備の蓄積の末、1488年、バルトロメオ・ディアスが喜望峰を回り、そして遂に1498年5月22日、ヴァスコ・ダ・ガマがマラバル海岸に到着した。

そして、ポルトガル人は1510年にはインド西岸のゴアの一部を割譲させ、東方の貿易の基地とした。その翌年には、マレー半島西海岸のマラッカを占領。そして香料諸島とも呼ばれるモルッカ諸島を掌中に入れた。

〔 〕 ザビエルの出発、そして宣教

1. 父、そして母と姉の死

ローマ・カトリック教会は《異邦人》に向けて「宣教」を試みた。その具体的なひとつのあらわれが、イグナチウス・ロヨラ、フランシスコ・ザビエルを始めパリ大学の七人の学生を中心として誕生した後にイエズス会と呼称される団体であった。

1534年8月15日、聖母被昇天の日、ザビエルは七人の同志と、モンマントルにおいて清貧、貞潔、聖地巡礼の誓いを立て、「キリストの兵士」として生きることを心に決め、契りを結んだ。

ザビエルはパンプロナ城が落ち、ナバナ王国は崩壊した戦で、国と父を失い、1529年、母マリア・アスピルクエタを失う。そして、1533年1月、絶えずザビエルの学業継続を望み、将来に心を砕き、ザビエルの司祭召命を望んでいた長姉であるクララ会修女マグダレナ帰天。姉の希望をザビエルは知らなかったはずはあり得ない。

2. 十字軍そして「宗教改革」の翳

何故、従来の修道士がたてる誓願の他に「聖地巡礼」が置かれているのか。聖地奪回を念頭に置いた十字軍の陰がなかったとは言えない。教皇パウロ三世の「なぜ、あなたたちはそんなにエルサレムに行きたがるのか」という問い掛けに、イグナチオ・デ・ロヨラ（イニゴ）は、教皇の望みなら世界各地、インドの奥地にまで行くことを公言する。カトリック（普遍）は、ローマン・カトリックと呼ばれるように、ユダヤからローマ帝国世界へ、そして、大航海時代に、ヨーロッパ世界がインドにまで及ぶにつれて、広がっていく。

その後、どうしたのか？ザビエルは九月になって、「イグナチオ・デ・ロヨラ（イニゴ）の指導」で、「霊操」を実践した。そして長期間の研鑽を必要とする博士課程ではなく、短期で神学を修めることができる課程に入り、司祭を目指した。1535年3月14日、哲学修士の学位を得たイグナチオ・デ・ロヨラ（イニゴ）は、胃病を患い、故郷での転地療養を迫られ、ベネチアでの再会を約して別れた。当時のベネチアはエルサレムへの道が一番開けた場所であった。イグナチオ・デ・ロヨラ（イニゴ）帰郷の途中、同志の家々を廻り、近況を伝え、聖地巡礼の賛助金を依頼した。また、ザビエルが言付けた次兄への書簡を預かる。

この書簡の中に眼を留めさせる個所が見られる。

「わたしがマエストレ・イニゴを知ることができたのは、主なる神のどれほど大きな恩恵であるか兄上にははっきり知っておいていただくために、この手紙で、わたしが一

生かかっても彼から受けた恩義をお返しするつもりであることをお約束します。彼は、私にとって必要な金や友人たちを幾度も与えてくださいましたし、私の未熟さから気づかぬままに交際していた悪い友人たちからも、彼のお陰で遠ざかることができました。今、これらの異端がパリに伝わっていますが、世界中のものを残らずやると言われても、私は絶対に彼らの仲間になろうとは思いません。

外見は善人に見せかけながら、内心では異端に満ちた人たちと話したり、交わったりすることを免れたというだけでも、マエストレ・イニゴにいつご恩返しができるか、私には分かりません(註3)。」

当時のパリは、エラスムスなどの人文主義が隆盛を極め、1517年のルターの九十五箇条の張り出し、カルヴァンも活動を始めた。時代の動きにザビエルも鈍感ではなかったということである。

1536年、神学の課程を修了し司祭叙階に必要な準備を終えた九人の同志は、十一月十五日、イグナチオ・デ・ロヨラ（イニゴ）が待つベネチアに向けて旅立った。ベネチアに着いたが、聖地巡礼船が出帆するまでの船待ち期間に、教皇に叙階の認可を受けるためにローマに足を延ばした。そして、1537年6月24日、洗礼者ヨハネの祝日にベニスで叙階された。

ザビエルは度重なる「イグナチオ・デ・ロヨラ（イニゴ）の指導」、説得により、故郷を出るときに申請した貴族の子弟に道が開かれていた高位聖職者への野望を捨て、1539年4月15日付けの第二書簡に見られるように、「回心」を果たした。

「下に署名する私は、先に神に祈り、熟慮を重ね、自らに判断して、〔イエズス会における〕従順の誓願は、神への賛美となり、会を永続させるものと確信していることを、全能なる神、いとも聖なるおとめマリア、天国の諸聖人の御前で宣言し足します。

そしてもしも私たちの主なる教皇が会を認可される暁には、- この宣言に拘束されることも、義務づけられることもなしに - イエズス会に入会し、身を捧げたいと熟慮のうえ、ここに表明します(註4)。」

それから一年後、

「いとも全善にまします神のご配慮により、全教会の頭である教皇聖下のご命令により、互いに遠く離れた全世界の各地に分散することになりますので、ひとつの身体として結ばれた私たちは、会全体にかかわる種々の問題、即ち、会見綱要の編纂、その他これに関する多くの問題が起こることを予想し、この度口 - マに集まった会員が考え以下のように決めましたが、その決定が真実であることを証明するため、下に署名します(註5)。」

1540年3月付けの書簡に見られるように、「全世界の各地」に派遣されることを明示している。

突如、ポルトガル行きを決心しローマを後にした旅の途上、四旬節のさなか1540年3月31日、ポローニャからの書簡に

「復活祭のまさにその日（1540年3月28日）、大使のところに届いた包みと一緒にお手紙を受け取りました。このお手紙によって、私がどれほど大きな喜びと慰めを受けたかは、主なる神がご存じでいらっしゃると思います。手紙によってだけ、この世で私たちは会い、あの世で顔と顔を合わせ（二コリント13,12）抱擁するのですから。私たちに

残されているこの世のわずかな時間のなかで、幾度も手紙によってお互いに会うようにいたしましょう(註6)。」

と記されている。既に、生きてヨーロッパに戻ることは考えていないザビエルの心根を垣間見ることができる。

同書簡のすこし後に

「ポルトガル大使は私にたくさんの贈り物を下さいましたが、ここには書き尽くすことができないほどです。思っても見なかったほどのご好意をいただき、感謝に堪えません。このご恩に感謝し、インドに行った時には、生命を懸けてお報いしたいと考えています(註7)。」

という言葉がある。ポルトガル国王ジョアン三世はザビエルたちが籍を置いていたサンタバルバラ学院の元院長から、彼らのことを耳にし、教皇特使ドン・ペドロ・マスカレンニャスを通じて、インド宣教のために六人のイエズス会員を求めた。しかし、イグナチオ・デ・ロヨラ(イニゴ)は、仲間の現状を鑑み、二人の宣教師を送ることを決めた。ロドリゲスは初期会員の中でただ一人のポルトガル人、またポパディリャは大使と知己であったので、この二人が選ばれてインドに行くことになった。いよいよ大使がポルトガルに戻る前日、1540年3月14日、ナポリからローマに戻ってきたポパディリャは、熱病に冒されていた。医師はポルトガルへの旅など無理と診断、会員たちも同意見であった。明日に迫った出発に、急いで代替りの者を任命しなければならなかった。イグナチオは、秘書をしていたザビエルを呼んで、『教皇の命令で二人インドへ行かねばならないが、選ばれたポパディリャは病気でいけない。彼が治るまで大使は待てない。これはあなたの仕事だ。』と言った。ザビエルは即座に、喜んで『結構です。用意は整っています。』と答え、翌15日にリスボンへ向けて、大使と共に出発した(註8)。」以上のような経緯で、突如、打診され、それを受容したのである。

リスボンに着き、乗船を待つ間、1541年3月18日に出した書簡には次のようなことが記してある。

「私たちがもうすぐ乗船することの他には、これ以上報告することはありません。主なるキリストにあの世の生活では身体的に相まみえ、一致する恩恵を願ってやみません。なぜなら、インドにはローマから非常に離れていますし、他の所を探さなくても、あちらにはたくさんの霊的な畑がありますので、私たちは、〔この世では〕再会できないと思うからです。まず最初に来世に行く誰かは、そこで主において愛する兄弟に会えませんから、神のご光栄のうちに私たちすべての者が集まれますように願ってくださいますように。(註9)」

そして1541年4月7日、ザビエル三十五歳の時、インド倉庫が建ち並ぶリスボンの港から、700トンのサンチャゴ号に乗って出航した。そして1542年5月6日、ザビエルを乗せた船が、インドのゴアに着いた。

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を述べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。(マルコ16,15 - 16)」

また、

「人は、例え全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の得があるうか。自分のいのちを買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。(マタイ16,26)」

ザビエル自身その書簡のなかで、

「主〔イエズス〕が仰せられた『たとい全世界を手に入れても、自分の魂を失ったらば、なんの益になるうか』という御言葉を、いつも心にとめておいていただきたい。(註10)」

これらの言葉に突き動かされるように、多くの若者が、生命を賭して船上の人となった。そして、その殆どが二度と帰らず、その土地の土となった。

フランシスコ・ザビエルもその一人であった。日本に来る前、既に見たような経緯で、ポルトガル王ジョアン三世の要請に応じて、インドに派遣された。

当時、インドはポルトガルのアジア統治の拠点であり、唯一の司教座があったゴアを中心として、使徒トマスまで遡ると言われる古いキリスト者がいるマラバル地方、また二万人が洗礼を受けたが、十分に教理を知らない人々のいるコモリン岬近辺の村々、セイロン島、使徒聖トマスの殉教の地であり、墓所もあるとされるサントメ(マドラス)、マラッカ、モルッカ諸島を宣教して回った。

現地を宣教するうちに、「地獄の苦しみにあえぐこの島の人々に、神のおしえを宣べ伝える者が不足している(註11)」。『私は理性を失った人のように大声を張り上げて、そちらの大学へ〔躍り込んで〕行きたいと幾度も思ったことです。とくにパリ大学に行き、ソルボンヌ学院で将来救霊のために働き、成果を挙げるために学問するのではなく、研究だけに携わっているような学者たちに、彼らの怠慢によって、どれほど多くの靈魂が、天国の栄光に行けずに、地獄に堕ちて行くかを話して聞かせたいのです(註12)』。悲しいほどに、取り憑かれたように焦り、苦しんでいる。その残された書簡のなかから、溢れるような真摯な熱意が伝わってくる。

前引用の少し後に、

「わたしが心配しているのは、大学で勉強している多くの人たちは、教会の高位や顕職にふさわしい学問を身につけたいと思うよりも、高位、聖職禄、司教の地位を得たいと願って学問していることです。『聖職禄や高位聖職の地位を得るために学問をして、高位聖職者になってから、神に奉仕しましょう。』というのが、学問をする人たちの常です」(註13)

「イエズス会員として十分な学識や能力に恵まれていない者であっても、もしもこちらのの人々と共に生き、共に死ぬ覚悟で来る人であれば、この地方のために有り余るほどの知識と能力を持っていることになります。(註14)」

「異教の人々はもしもよく導くならば、喜んでよりよい生活をしたいと思っておりますが、教理を教える人々が不足しているため、暗黒の淵に沈み、(中略)みじめにもその靈魂を永遠の地獄に転落させようとしているのです。(註15)」

インドの地に死に、この地に骨を埋め、この地の土になる人を切に求めている。

ポルトガル王ジョアン三世が、教皇庁に斡旋以来した結果、実現したインド渡航であったが、ザビエルはインドの人々に対する想いそのものは熱いものであった。その当事者のジョアン三世に、1545年1月20日、コーチンから出した書簡は語る。その「熱意」は、国王への直訴に駆り立てる。

「主なる神がすべてのキリスト教君主たちのうちからお選びになって、このインドを統治するようにお任せになったのは、陛下が委ねられた責任をどのように忠実に果たされるか、また神からいただいた恩恵にどのように感謝の心をもって答えられるかをご覧になるためであることを陛下ご自身で熟考あそばされるように、お願い申し上げます。

と申しますのは遠い国々から高価な産物がポルトガルにもたらされ、外地の宝庫か

ら貴重品が輸入されて、皇室の財庫が豊かになることにご注目あそばされるよりも、臣下の英雄的な企画を実現する機会をお与えになり、高邁な聖徳と敬虔なお心から恵み深い天性お示しになられて、宣教師たちの使徒的活動にご熱意をもたれ、インドの未信者たちに創造主とこの世の救い主とを認めさせるようにおとりはからいなることを、神はお望みだからです。(註16)」

「陛下におかれましては、深くご反省いただき、神の慈しみによって、このインドから受けられたすべての恩恵と、物質的利益とを正確に計算していただきとうございます。その利益の総額から、この地方において神への奉仕と教会のために費やされた額を差し引いてごらんください。こうして陛下が手にされた利益と神の利益、そのご栄光のために得られた利益とを比べ合わせながら、陛下は感謝と敬虔なお心をもって、善良にして公正にご判断なさってください。ご注意いただきたいのは、万物の創造主は物惜しみせず、善きものすべてをお与えになる態度を示しておられますのに、陛下からはほんのわずかの報いしか受けていない〔ので、不満を抱いておられるものと〕お考えにならないで下さい。陛下はこの利益の比較照合をためられる時間の余裕はございません。お延ばしになることも不可能でございます。なぜなら、たいへん急ぐことで、すぐに処置すべき事柄でございます。

陛下に対する誠実な愛情と熱意とが私を揺り動かし、このように書かせております。陛下がインドにおいて吝嗇な態度を示しておられるために、インドから怨嗟の声が天に昇っているように私には思えるからでございます。インドからの豊かな利得で王庫は満ち満ちておりますのに、この地方の霊的な困窮を救済するためには、得られた富のごくわずかしが費やしておられないからです。(註17)」

3. フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) の「宣教」

これほどの熱意、「死を覚悟」しての心情にもかかわらず、ザビエルの宣教は、「洗礼を授けること」、「信者にすること」が、中心であった。

この宣教活動のなかで、現代に生きる我々の耳目をを引っつけるのは、1544年、コモリン岬西側、マクア族十四ヶ村で行われた、一万人の漁夫の洗礼の事実である。

「一ヶ月に一万以上の人々に洗礼を授けた方法は、次のような順序でした。信者をつくるために私を招いた〔信者でない〕人々の村に着くと、村の男たちと子供たちを一個所に集め、聖父(ちち)と聖子(こ)と聖霊を唱えることから始め、三度、十字を切った後、三つのペルソナを呼んで、唯一の神を公言します。これを終えると、告白の祈りを唱え、その後、使徒信経、十戒、主の祈り、アヴェ・マリア、元后あわれみ深き御母(サルヴェ・レジナ)を唱えます。この祈りのすべては、二年前にタミール語に訳して暗記しているものです。私は短い白上着をつけ、大きな声で前に述べた順序で祈りを唱えます。そして私が先唱すると、大人も子供もすべてのものが、私が唱えた通りに、つづいて復唱します。祈り終われば、信仰箇条と神の掟についてタミール語で説明します。その後、すべての者が、主なる神に公に過去の罪のゆるしを願います。信者になりたくない人々の前で、大声を張り上げて〔ゆるしを願いますので〕、悪人は当惑し、善人は慰めを得ます。神の教えを聞く信者でない人たちは、皆、感嘆し、神の存在を知らず、認めないで生活していることを理解して、当惑します。〔信者でな

い人々]は、私たちの教えを聴くことを、たいへん喜んでいる様子です。そして真理を認めたくない人々さえも、私に敬意を表します。説教を終えると、大人にも子供にもすべての人に信仰箇条の一つひとつについて、確かに信じるかどうか尋ねます。彼らは胸の上に腕を十字のかたち組みながら、『はい』と答えます。そこで、一人ひとりに霊名を書いて与え、洗礼を授けます。この人々は家に帰ってから〔信仰を受けた感動を〕妻や家族の者に伝え、私たちのところに来させますので、男たちに洗礼を授けたと同じ順序で洗礼を授けます。(註18)』

また、マカッサル地方では、

「八ヶ月前に三人の強力な支配者たちと大勢の人々と共に信者になりました。その支配者たちは、ポルトガル王の要塞(テルナテ)へ人を送って、教理を教え、教育する宣教師を送ってくれるように頼みました。彼らは今まで野獣のような生活をしていましたので、今からは人間として生き、神を知り、神に仕えたいと望んだからです。そこでポルトガル国王の要塞(テルナテ)長官は、聖なる信仰を宣教するために、聖職者を送りました。あなた方にこのように様々なことをお知らせしましたので、この地方がたくさんの成果を挙げるために、どれほどよく準備されているかがお分かりいただけるでしょう。それゆえ、『ぶどう畑に働く人を送ってくださるように、刈り入れの主に祈り求めなさい(マタイ9,38)』。この地方はたいへんよく整えられていますので、今年中に十万以上の人々が信者になるであろうと主なる神において信じます。(註19)』

「ジャフナパタンとクイロン海岸では今年中に十万人以上がイエズス・キリストの教会に加わるでしょう。(註20)』

確かに当時の「秘蹟」理解、なかでも洗礼の理解は以下のものであった。

「告解を聞いたり、説教をしたり、その他イエズス会の大切な聖務を行うために、十分な能力がない者であっても、霊操が終えてから数ヶ月謙遜な修行をし〔て入会を認められた者で〕体力とそれに伴う精神力が備わっていれば、この地方で大いに宣教活動ができるでしょう。なぜなら、祈りをおしえ、また村々を訪れて生まれたばかりの幼児に洗礼を授けるからです。この地方の信者でない人々のために学識は必要ではありません。洗礼を授ける人が不足しているために、誰も洗礼を授けないうちに、たくさん〔の幼児が〕死んでいきますし、わたしたちはすべての村々に駆けつけることができませんので、〔たくさんの方が必要なのです〕。それ故、イエズス会に入会できる〔理想的な〕人物でなくても、村から村を巡って洗礼を授け、祈りを教えるのには十分であると思う人を派遣して下さい。(註21)』

「また生まれたばかりの幼児に早く洗礼を授けるように、特に気をつけて下さい。なぜなら、大人はどんなに勧めても、どんな方法を使っても、天国に行きたがらないのですから。せめて洗礼を受けてから死んでいく幼児たちだけでも、天国に行ってもらいたいです。(註22)』

当然のことながら、「大人」が「天国」に生きてがらないのではない。なぜ、唯々として洗礼を受けないのかは、理解できなかったところに時代の制約が感じられる。焦慮の念が強すぎたことも一因であろうが、相対する人々の背後にある「文化」に対する考慮が望まれた。彼にできることとして、ただ、ひたすら幼児の洗礼を緊切した問題と考えた。これをどのように考えればいいのか。人間の救い

は、いかにイエスのように感じ、イエスのように考え、イエスのように語り、イエスのように行い、イエスのように生きるということだけではなく、ザビエルは洗礼を受けることによってしか実現しないと理解し、「回心」に、必ず「受洗」ということが付随しているのである。即ち、この時代は、「救い」は、「信者」になることと切り離せることではなかったということである。やはり、その文面から強く感じられるのは、秘蹟としての洗礼が、人間の救霊の必須条件という認識である。当然そこには時代の「原罪」に対する理解が前提している。1544年から始まったトリエント公会議でも

「その核心は、神の恩寵は秘蹟が遂行されることにより（ex opere operato）与えられるのであって、神の約束への信仰のみによって与えられるのではないという点である。」

（「公会議史」H. イエーデン）

このような見解が示されていたのである。彼は、この会議の決定を知ることにはなかったと考えられる。

3. 他宗教との邂逅

また、時代の翳は、秘蹟としての「洗礼」の理解だけではなく、他宗教への対応においても見ることができる。

「歩いていくと一人も信者の居ない[信者でない人々の]村に着きました。彼らは隣の村々の人が信仰に改宗したときに、信者になることを望まない[信者ではない]領主の支配下にあつたため、信者にならなかつたのだそうです。この村に三日間も陣痛で苦しみ、生命も危ぶまれていた婦人がおりました。[信者ではない人々の]神々は皆悪魔ですから、その祈りは嘉（よみ）せられず、彼らの願いは主の御前に聞き入れられず、認められませんでした。私は連れてきた聖職者の一人と一緒に、陣痛で苦しんでいる婦人の家に行きました。私はその家に入り、悪魔の地にいることを考えないで、『地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは神のもの（詩編24,1）』と信じて、キリストの御名を信頼をこめて呼び奉りました。そして、使徒信教を唱えはじめ、わたしが連れてきた聖職者が、それを彼らの言葉（タミール語）で説明しましたところ、神の慈しみによって、彼女は信仰箇条を信じるようになりました。彼女に信者になることを望むかと尋ねますと、心から信者になりたいと答えました。そして、その家で今まで決して語られなかつたとおもわれる聖書を朗読してから、わたしは彼女に洗礼を授けました。驚いたことには、洗礼の後すぐにイエズス・キリストに安心して希望を託し、信頼した婦人は、子供を産んだのです。その後、彼女の夫、男の子、女の子、その日に生まれた幼な児、家の者すべてに洗礼を授けました。（註23）」

この個所でも、「信者」であるか、「信者」でないか、また、「信者になるか」、[信者にならないか]は、大きな分水界をなしている。他宗教の神、即ち「[信者でない人々]の神々は、皆悪魔」で、他の信仰を持つ人々が住む地は、「悪魔の地」という認識があつた。

「もしもこのような人が、毎年一、二人ずつ来るならば、マホメットの邪宗をごく短い期間で滅ぼし、すべての人々が信者になるでしょう。そうすれば、邪教の悪習や罪を誰も指摘しないために、これほどまでに侮辱されている主なる神が、侮辱されなくなるでしょう。（註24）」

ここにもザビエルの熱い心情は感じられるが、他の宗教、異なる信仰を「邪宗」、「邪教」と呼んでしまうような教理を植え込んだ時代の影がみえる。

先ほど引用した、一万人に洗礼を授けた個所の後に以下のように記している。

「人々に洗礼を受けた後で、偶像を祭ってある家を倒すことを命じます。彼らは信者になると、偶像を粉々に砕いてしまいます。以前に偶像を崇拜していた人たちの手で〔それまで拝んでいた〕偶像をこわすのを見ながら、私の心にこみ上げてくる大きな慰めは、とても書き尽くすことができません。(註25)」

この記述は、私たちと時空を超えたものであることを認めなければならないが、しかし、どのように受け止めればいいのか。これは更に進み、他宗教の「聖なるもの」、その聖なるものを礼拝する「聖なる場所」の破壊行為に到る。そして、それを〔見ながら〕とても「大きな慰め」が「こみ上げる」。ここにみられるように、他の宗教に対しては決して寛大であるとはいえなかった。

〔 〕フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) と日本

1549年、フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) は、ゴメス、ミセル・パウロ、バルゼオ等々の会員間の精神的な軋轢に後顧の憂いを残しながら、アンジロウ、ジョアン、アントニオ、を伴い、ゴアを出発し、コーチン、マラッカを経、台湾の北を通り、8月15日、1534年にモンマルトルで初誓願を立てた、その同じ日に鹿児島島の地を踏んだ。

インド、マラッカ、モルッカでと同様、フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) の他の宗教に対する姿勢は、やはり変化は見られなかった。そして、時代が少し下って、ザビエルとその後継者たちを通して教理を学んだ信徒たちは、後に豊臣秀吉がイエズス会準管区長コエリヨに申し入れをするほどに、神社仏閣を「破壊し、仏僧に迫害を加えて、これと融和しないこともあった」。

なによりザビエルの思念のなかに異教徒に対する寛容性の薄弱が見られる。後に聖信のパウロと呼ばれたアンジロウとの出会いから日本に対する憧憬が生まれ、日本に行くことを決心した。そして、鹿児島に到着してから、投函した五通の書簡のなかにも、とりわけGeorg Schurhammerの校訂編纂した全書簡137通中もっとも長い書簡のなかにも依然としてみるができる。「わたしたちと日本に行く兄弟、同伴者である日本人がわたしに話すところによると、もしも私たちが肉や魚を食べるのを見れば、日本人僧侶にはつまずきとなるだろうとのことです。私たちは誰にもつまずきを与えないように、絶対に肉食をしない覚悟で渡航します(註26)」。このようにザビエルは日本に対して多大な配慮を示してはいるが、「彼らと私たちとは神の認識や人びとの救霊について見解をことにしています(註27)」と記しているように、「私たちの聖職者と同様(註28)」黒衣を纏っている禅宗の僧侶に対して、この時代としては、或る意味では自然なことではあるが、異なる思念を持つ他者とは相容れない感慨を抱いている。彼ら黒衣の僧に対しても、「彼らは決して肉や魚を食べず、野菜と果物と米だけを食べ、一日に一度の食事はきわめて規律正しく、酒は与えられません(註29)」鹿児島島の地において、「学識豊かで生活態度が立派で」「忍室」と呼ばれていた曹洞宗福昌寺十五世の住職と「幾度も語り合い」「たいへん親しい間柄(註30)」になっても、その溝は埋められず、主として双方の差異にザビエルの関心は向かっている。また日本人に対しても、「この国は今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけれないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何ものよりも名誉を重んじます。大部分の人びとは貧しいのですが、武士も、そうでない人びとも、貧しいことを不名誉とは思っていません(註31)」。『名誉は富よりも大切なものとされているのです。他人との交際はたいへん礼儀正しく(註32)』、「人びとは賭博を一切しません。賭博をする人たちは他人の物を欲しがるので、そのあげく盗人になると考え、たいへん不名誉なことだと思っているからです。」「彼らは一人の妻しか持ちません。この地方では盗人は少なく」「過去の生活についていろいろな地方を見てきた限りでは、それがキリス

ト教信者の地方であっても、そうでない地方であっても、盗みについてこれほどまでに節操のある人びとを見たことがありません(註33)。「彼らはいへん善良な人々で、社交性があり、また知識欲はきわめて旺盛です(註34)。「この国では飼っている家畜を殺したり食べたりせず、時どき魚を食べ、少量ですが米と麦を食べています。彼らが食べる野菜はたくさんあり、少しですが幾種類かの果物もあります。この地の人びとは不思議なほど健康で、老人たちがたくさんいます。たとえ満足ではないとしても自然のままに、わずかな食物で生きてゆけるものだということが、日本人の生活を見ているとよくわかります。私たちはこの地できわめて健康に暮らしています(註35)」

多々様々に抜粋してきたが、このような人間であっても、ただ洗礼を受けていない、キリスト教徒ではないということで、「1500年以上も地上で神のように礼拝されてきたサタンに捕らわれている靈魂を自由にしたいという私たちの心の思い、意向と貧しい望みのすべては、神に明らかだからです。というのも、悪魔は天国では勢力がありませんでしたし、そこから追い出された後では、できるだけ多くの人たちに復讐し、日本人をもまた苦しめているからです(註36)」という認識がある。みづからが呼ぶ神の名以外で呼ばれる神的な名称は、「サタン」と置き換えられている。

確かに、「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命(魂)を失ったなら、なんの得(益)があるか(マタイ16,26)」という言葉にて、世俗の栄達を断念し、司祭の道を志し、そして、使徒パウロが語るように、「わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです(コリ9,16)」。突き動かされるような想いで、「わたしはこのインドで地方において生涯〔働きつづけたい〕と思っておりますので、この世では陛下には拝謁できません(註37)。「シナか日本で生涯を終わりたいと思っております(註38)」。もちろんインド、シナ、日本といったことは問題ではない。即ち、「見知らぬ浜辺に向かい」旅立ち、故郷を遠く離れた宣教の地で、その地の土となる覚悟が見える。その志は常人にはなかなかできがたいことであり、いたくひとの心に響くものがあるが、ザビエルも時代の子であり、無意識裡にもその時代の「西欧の文化」をも押しつけようとはしなかったであろうか。その言動から見たかぎりでは、やはり時代の束縛から自由であるとは言えない。ザビエル自身も或る意味では時代の被害者であり、ザビエルの志がひとの心を打つだけに、なお一層悲惨の感を拭い得ない。

〔 〕 他の諸宗教、他文化に生きる人々との対話

他の諸宗教、それぞれの地域の文化への対応は、おおよそ四百五十年前だけのことではなく、近年の第二ヴァチカン公会議前まで、永年ほとんど異ならなかったのではないだろうか。

文化とは「生活様式まで含めた広く多様性に富んだもの(註39)」であり、福音と福音宣教が、すべての文化から独立したもの(註40)である以上、これからの教会、即ち「神の子らの家族」は、「まだキリストの食卓を囲んでいない人びと」が、永年大切にしてきた社会習慣や伝統を尊重し、その信仰、伝統文化、慣習を見下すことなく、その土地に住む人々に深い敬意を払いながら対話を繰り返していかなければならない。また、そうすることによって「種々の文化形態と交わることができ、それによって教会自身も種々の文化も共に豊かになる(註41)」からである。

宣教者は、自己の信仰、文化、慣習を強要することなく、現地の人々とその文化を尊重し、対話を重ねながら福音を伝え、単なる言葉だけの口舌の徒ではなく、何よりもみづからが福音に立脚した生活を送り、その社会のなかで生きてゆくみづからの姿を通して「おこない」で証し「諸文化を福音化(註42)」し、そして福音化された社会状況を創始し、その結果を見た現地の人々の判断を待つしかない

のである。マザーテレサの以下の発言がよくそのことを物語っている。

「キリストに近づこうとしている人たちにとって、キリスト教信者たちが最悪の障害物になっていることがよくあります。言葉でだけきれいなことを言って、自分は実行していないことがあるからです。人々がキリストを信じようとしないう原因はそこにあります。(マザーテレサ「愛と祈りのことば」, PHP, 1997)

おわりに

フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) は、やはりこの時代に生きた人であった。そして、それはザビエルが貶められるということではなく、或る意味ではその時代を誠実に生きたひとつの姿であるといえる。一人の人間が「理性を失ったひとのように大声を張り上げ(註43) 生命を賭して仕遂げようとしたことのうちにも時代が翳を落としているのは、仕方がないことかもしれないが、どこか人間のかなしさを想う。

確かに「教会の外に救いはない」という時代の制約を受けていたにもかかわらず、時代を超える一面も具備している。その書簡の到るところに見られるように、「私たちの救いのために、最初に命を捧げられたキリストへの愛のために……衷心より彼に倣って命を捧げる(註44)」ほどに、「神への奉仕(註45)」と、人々のためのはたらきを見ることが出来る。

そして、その「生命を捧げる」証しは「人々をしあわせにし、人々が喜び溢れる」ことでなければならない。道端に座っている老いたひとに触れたマザー・テレサが、語っているように

「何年もの間、わたしは人の手に触れたことはなかった。あなたはわたしの人生に喜びをもたらしてくださった。何年もたって、わたしは初めて人の手のぬくもりに触れました。」

と、心からぬくもりを感じ、よろこびにみちあふれることが福音を伝える者が心し目指すべき姿ではないだろうか。このような証しこそが、言葉を超えて人々の心を打ち、人々を福音に招くのではないだろうか。

「わたしの推薦状は、あなた自身です。それは、わたしたちの心に書かれており、すべての人々から知られ、読まれています。あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。(コリントの信徒への手紙 二 4,2 - 3b)」

現代において、「あなた方は真理を知り、真理はあなたたちを自由にする (ヨハネ福音書 8,32)」をよく噛みしめ、人々の尊厳を何よりも重んじ、かかわるその人の身が属している文化、その人々が身に付けている慣習を尊重しながら、「生命を懸けて」共に生きることが、福音を伝え、福音が文化内開花することではないだろうか。

[註]

- 1 . E.Casper, Geschichte des Papasttums von den Anfungen bis zur Höhe der Weltherrschaft, Tübingen 1933, , p.514
- 2 . P. S . Allen , op , cit . , , n . 1114
- 3 . G.Schurhammer S.J. et J. Wicki S.J. Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta. Tomus , , Monumenta. Historica Soc. Jesu. Romae 1944-45
「聖フランシスコ全書簡」 河野純徳訳 平凡社 1985 書簡第一
- 4 . ibid . 2
- 5 . ibid . 3
- 6 . ibid . 5,1
- 7 . ibid . 5,3
- 8 . ibid . 6,1
- 9 . ibid . 11,9
- 10 . ibid . 90,25
- 11 . ibid . 55,12
- 12 . ibid . 20,8
- 13 . ibid .
- 14 . ibid . 55,9
- 15 . ibid . 46,2
- 16 . ibid . 46,1
- 17 . ibid . 46,8
- 18 . ibid . 48,2
- 19 . ibid . 48,5
- 20 . ibid . 46,9
- 21 . ibid . 47,2
- 22 . ibid . 29,2
- 23 . ibid . 19,3
- 24 . ibid . 55,9
- 25 . ibid . 48,2
- 26 . ibid . 85,15
- 27 . ibid . 90,47
- 28 . ibid .
- 29 . ibid . 90,46
- 30 . ibid . 90,19
- 31 . ibid . 90,12
- 32 . ibid . 90,13
- 33 . ibid . 90,15
- 34 . ibid . 90,14
- 35 . ibid . 90,45
- 36 . ibid . 90,52

37 . ibid . 46,12

38 . ibid. 107,17

39 . 「現代世界憲章」 53、 「福音宣教」 20

40 . 「福音宣教」 20

41 . 「現代世界憲章」 58

42 . 「福音宣教」 20

43 . G.Schurhammer S.J. et J. Wicki S.J. Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta.

Tomus , , Monumenta. Historica Soc. Jesu. Romae 1944-45

「聖フランシスコ全書簡」 河野純徳訳 平凡社, 1985, 書簡 20,8

44 . ibid . 91,2

45 . ibid . 90,36